

東博所蔵の江戸医学館旧蔵書に関する検討

天野 陽介¹⁾, 小曾戸 洋¹⁾, 町 泉寿郎²⁾, 星野 卓之¹⁾¹⁾北里大学東洋医学総合研究所, ²⁾二松学舎大学

江戸医学館解体後、その蔵書は所蔵先の変遷を経つつ現在、その多くは国立公文書館内閣文庫、宮内庁書陵部、東京国立博物館（東博と略）に現蔵されている。江戸医学館旧蔵書のおおよその流れは把握されているが、その具体的な移動について未だ検討はなされていない。今回、東博に所蔵される江戸医学館旧蔵漢籍について目録上で調査を行ったので報告する。

東博現蔵書の目録と、江戸医学館蔵の漢籍を収録した『躋寿館医籍備考』（『医籍備考』と略）目録上で比較、各書について照合・同定作業を行った。東博目は『江戸幕府旧蔵資料の総合的研究』（2008刊）を用いた。江戸医学館旧蔵書として漢籍123部、国書72部、計195部が収載されている。このうち、今回は漢籍のみを対象とした。

『医籍備考』（1877刊）は高島祐啓・岡田昌春による江戸医学館旧蔵書の解題書。江戸医学館蔵書の喪失を惜しみ編まれたもので、医学館最終時所蔵の漢籍医書1,369部を録している。序文に「国書は別録して後編とする」とあるとおり漢籍のみを収録している。

東博目を『医籍備考』の書籍分類に従い、その構成を検討すると次の通り（括弧内は部数・総部数に占める割合）。経解内経（7・5.7%）、経解難経（1・0.8%）、本草（50・40.7%）、本草丹朮（2・1.6%）、本草食治（5・4.1%）、本草農書（2・1.6%）、診法（2・1.6%）、明堂経脈（1・0.8%）、傷寒証治（2・1.6%）、衆病証治（24・19.5%）、眼目口齒証治（2・1.6%）、外科証治（1・0.8%）、婦人症治（5・4.1%）、小児証治（4・3.3%）、痘疹証治（2・1.6%）、雑説（2・1.6%）、史伝（3・2.4%）、史伝書目（1・0.8%）、養生（1・0.8%）、祝由（1・0.8%）、叢書（3・2.4%）。以上の結果から、東博現蔵の医学館旧蔵医書は本草に関わる書が約半数を占めていることが分かった。

東博目と『医籍備考』の目録上における書籍同定作業については、両目録には不備があるため十分な結果を得ることができなかったが、東博目の約6割を『医籍備考』収載本と同定することができた。東博現蔵書のさらなる調査と目録の補完が望まれる。

蔵書印には「多紀氏蔵書印」「躋寿殿書籍記」「江戸医学蔵書之記」のいずれかは全ての書に含まれている。また、蔵書印「大学東校」を含む書籍が26部見られた。これらの書は医学館から大学東校を経て現在の東博に移管されてきた経緯を表している。従来、大学東校の蔵書は明治10年に東大図書館に移され、その後明治12年に震災で焼失したとされているが、大学東校から東博に移され震災の難を逃れた書である可能性を示唆するものとして興味深い。

東博目に「鍼灸資生経（052-4-106）、2冊、金沢文庫本」と記載される書は、『医籍備考』にある「鍼灸資生経、7巻8冊、影鈔金沢文庫本」の一部。残る6冊は現在内閣文庫に所蔵されている。どういう経緯か、東博に第1・2冊目が、第3冊以下の6冊が内閣文庫に分離したのである。

また、『医籍備考』にある「太平聖恵方 零本、5巻（存第73・74・79・80・81）3冊、宋槧本」は金沢文庫の旧蔵にかかる宋刊の槧本である。宮内庁書陵部に巻73・74・79・80の2冊が現蔵（558函6号）。巻81の1冊は東博に所蔵されていたと報告があるが（樋口秀雄、『書誌学月報』、1981）、今回調査した東博目には見いだせなかった。現在その行方は不明である。

今後、内閣文庫や宮内庁書陵部に所蔵される江戸医学館旧蔵医書についてもさらに調査をすすめていく所存である。